



1. プリーフィングを終え、いよいよ戦場へ…といった緊張感が微塵もないのは「ラジコン・パーティ」のいいところ。仲間と楽しみ、競い合う…単純に胸の高まりを仲間と共有できる楽しさがそこにある。2. マシンの調整も自らの手で行う。マシンと対話することが大切なのは、リアル・モータースポーツの証。3. マシン自慢はクルマ好き共通のもの。「空力が…」などと話題は尽きない。



1. サーキットで走らせる前に、まずは練習。8の字走行では早くも四苦八苦…。2. 燃料補充やタイヤの交換と、教えられるがままに出走準備に追われる。ただ、いつも顔に笑みが絶えないのが「ラジコン・パーティ」の特徴。3. アクセル操作やステアリング操作…わずかな操作にもリニアに反応するのがホビーラジコンならではの。4. 竹田津キャプテン、久々に触れるラジコンは？ 5. 初めてながらも余裕の表情は丸山選手。6. 道上選手の華麗な操縦。



1. RCでも全日本トップクラスの道上選手は別格。対する3人は実力伯仲。2. エンジン始動でさえも真剣そのもの。3. 経験では多少のアドバンテージを持っていた竹田津キャプテンにハンデを与えてレースはスタート。4. 結局、ハンデがレースの行方を大きく左右した。わずかな差でトップを獲ったのは丸山選手。5. レース中も随所でこのような痛々しい光景が…。ただ、それも仲間うちなら笑いとツツコミのネタになってしまうのが「ラジコン・パーティ」のいいところ。



KYOSHO
MotorSports

ahead 1/10 RC Motorsports vol.5

Enjoy it!

自分のマシンを操り、走らせる。その楽しさ、ドキドキ感は、スケールサイズが異なろうとも変わりはない。スケールを超えたモータースポーツの世界…京商が主催する「ラジコン・パーティ! in KYOSHO CIRCUITS」に、aheadでもおなじみの面々が参加してきた。

文・世良耕太 写真・長谷川 徹 構成・桜間 潤



1. 「電動なら多少の経験はあるけど…」と大鶴義丹さん。恐らく初めて触れるであろうエンジンカーに興味津々。隣では道上 龍さんがアドバイス。2. ラジコンは初めてという丸山 浩さん。精緻な造りにまずは興味を引かれたようだった。目はすでにレーシングドライバのものになっている!? 3. 「ラジコン・パーティ」はプリーフィングから始まる。ラジコンを知らずして的確な操縦はない…それがコンセプトである。4. 3名に預けられたのはフェーザー。リアルな造形に視線を引きつけられる。

男ってなんて分かりやすい生き物なんだらうと思う。仕事や学校に行く日の朝は目覚まし時計が鳴ってもぐすぐずしているくせに、遊びが目的だと誰に起こされるでもなくバツリ目が覚める。この日「ラジコン・パーティ」に集まった3人もきつとそうだったに違いない。俳優・監督・作家業をこなす大鶴義丹さん、二輪ライダー&四輪ドライバーとして活躍する丸山 浩さん、ライダースクラブ編集長の竹田津敏信さん。有り体に言えはみんないい大人」である。

そんないい大人(年齢的にも、精神的にも)が休日の京商サーキットに集まった。1/10スケールのラジコン、それも実車顔負けの高回転サウンドを発するGP(ガスパワー)カーで存分に本格走行を楽しむためである。

その3人 集まるなり視線は走りのステージを求めて泳いでいたが、京商スタッフに促されてレクチャールームへ。そして、決意表明。

「今日は童心に返って頑張りますよ」と、電動オフロードバギー経験者の大鶴さん。「汗かいて帰りたい」と語ったのは丸山さんで、ラジコン初体験であることを告白した。「コソ練して出し抜こうと思ったけど、時間がなかった」と頭を掻いたのは、久しぶりにラジコンに触れる竹田津さんである。

3人仲良く並んで座った横にはレーシングドライバーの道上 龍選手。ラジコンレースの世界でも優勝経験を持つ

道上選手が指南役となり、いい大人3人をラジコンの世界に導こうという寸法だ。その道上選手が、モータースポーツとラジコンの共通点を語った。「操縦台に上がると膝が震えます。その感覚は実車のレースと同じですよ」。

GP入門マシン「フーザーシリーズ」を手にした3人は、シャシーを持ち上げてはあつちに傾けこつちに傾けたりし、精緻なメカニズムに釘付け。目の前では、GPカーを始める際の最大の難関とも思えるエンジン始動手順とキャブレターの調整方法について説明しているのに、心ここにあらず、といった様子だ。こんな調子で大丈夫か。という不安は、思い過ごしにすぎなかった。いつの間にか体得したのか、右旋回、左旋回、8の字旋回と練習を重ねるうちに、手首のスナップをうまく利かせて始動するコツをつかんでいる。でも、走りはハチャメチャ。だからこそ、表情は真剣そのもの。「特訓でなくてパーティですかね」「自分でコントロールできない速度まで上げないのが鉄則です。実車と同じですよ」という京商スタッフの叫びが、3人の童心ぶりを物語っている。

その3人「上達すると、実際に乗っていないでもクルマの動きが感じられるようになります」と語った道上選手の言葉に刺激されたくしく、「早く感覚で走れるようになりたい」と、プロポを握りしめるのだった。時間のことなどどつくに忘れて…。